

佐賀県唐津市における「呼子朝市」の存続基盤

小島大輔・谷口佳菜子・城前奈美
長崎国際大学人間社会学部国際観光学科

本稿では、唐津市呼子町における「呼子朝市」について、観光化の変遷と出店者の構成から、その存続基盤を検討することを目的とする。

「呼子朝市」は地域の変化に合わせて移動しており、また法律への対応のために組織化するなど柔軟に対応してきた。さらに、「呼子朝市」では「生活市」としての機能が低下していくなかで、「観光市」としての機能が増した。「呼子朝市」の出店者調査で、①鮮魚にイカが付加された呼子独特の出店品目構成による集客、②加工・乾物水産物販売による保存が可能な土産品の提供、③野菜販売者による賑わいの補強、④その他の販売による土産品目の多様性の創出、が把握され、いずれも「観光市」としての機能であった。ただし、この存続基盤の背景には、「生活市」としての機能が消失されず、賑わいの補強につながっていること、出店者同士の交流が出店者の出店意欲を維持させていることがある。

キーワード：呼子朝市、観光化、イカ、佐賀県唐津市

I はじめに

1. 研究の背景と目的

近年、朝市における全国的な衰退が見られ、朝市の役割について積極的な探究がなされている。例えば、細野（1997）は朝市出品用作物の栽培によって都市農業が維持される可能性を示した。また、三原（2003）は、朝市における女性の起業活動が女性の地位向上と生活技術の再評価などの効果をもたらすことを示した¹⁾。

一方で、地域活性化の手段として朝市が注目され、朝市の観光化が指摘されている。杉本（2007）は、朝市を訪れる観光客の増加が販売品目の変化および商店街との連携をもたらす地域活性化に寄与したことを報告した。

福田（2001）は、街路市（朝市）を形態別に、地域住民を対象とした「生活市」と、温泉や観光地などの来訪客を対象とした「観光市」、その地域固有の産物を販売する「産地市」に分類している²⁾。

中村（2011）は、朝市を観光資源として捉え、

外来客を呼び込む役割を担うものを「観光型朝市」と呼んでいる。その代表例として、函館朝市、輪島朝市、飛騨高山朝市、高知の日曜市、呼子朝市、あつみ温泉朝市をあげている。また、地域内の消費者を対象として、農産物や食料品、生活必需品などを提供し続けてきた一部の朝市は、2000年代に入り各地で復活や新設が行われてきたことから、それらを「地域密着型朝市」と呼んでいる。この地域密着型朝市には、歴史ある朝市として、新潟県の上越地域における朝市、高知県高知市内における朝市、秋田県五城目朝市があげられている。これらは、観光資源としての活用もなされているが、主な来訪客は地元および周辺地域の一般消費者であることを特徴としている。

以上のように、朝市は、形態により多様な分類がなされていることがわかる。そこで、本研究では、先行研究をもとに、朝市を定期市の一つとして捉え、次のとおり定義する。

- ・開催時間帯は、早朝から午前中である。
- ・開催は、月に1回以上である。（年に数回開催される市、例えば有田陶器市等は除外する。）

- ・固定した店舗のみで形成された市場ではない。
- ・購入者は、事業者に限らず個人消費者を含む。

個人消費者は、地元住民・観光客を問わない。

近年「朝市」は、前述の定義を越えた、様々な形態の直売イベントとして一般的に用いられている。また、1988年から「全国朝市サミット」が開催され³⁾、イベント的手法による集客・広報戦略がとられている。さらに、近年様々な地域において、開催頻度の低いイベントとしての「創られた朝市」が地域活性化の手段として用いられている。

本稿の対象とする朝市は、唐津市呼子町の朝市通り商店街において開催されている。この朝市は「呼子朝市」と呼ばれ、既存の朝市のうちでは、イベントとは異なる高い開催頻度で、既存の商店街の通り全体を占める規模を維持しながら存続している。そこで、本稿では、唐津市呼子町における「呼子朝市」について、観光化の変遷と出店者の構成から、その存続基盤を検討することを目的とする。

2. 研究対象地域

本研究の対象がある佐賀県唐津市は佐賀県北西部に位置する玄界灘に臨む都市である(図1)。市の面積は、県内最大の487.54km²に至る。

現在の市域は、2005年に旧唐津市と周辺6町1村が対等合併し、さらに2006年に1村が編入されたことで形成された。人口は、127,522人(2015年1月1日)であり、県内では佐賀市に次ぐ第2位の都市である。東部は福岡市から50km圏内にあり、福岡市の都市圏に属している。また、唐津港は、玄界灘の離島への海上交通の拠点として機能している。

本研究の対象地域の呼子地域とは、東松浦半島の北端に位置する2005年の合併前の旧呼子町の範囲であり、現在の唐津市呼子町と一致する。呼子地域の人口は、1955年には10,333人あったが、

その後減少を続け、現在は5,107人(2015年1月1日)である。

呼子港は、漁港としての機能のほかに、以前は周辺の離島との交通拠点であり、離島の住民にとって、水揚げした海産物の取引や生活品を購入するための中心地であった。現在は、一部の航路が残るのみであり、遊覧船や釣り船の発着点として機能している。また域内の人口減少と中心商店街の衰退によって、現在呼子地域の中心地としての機能は大きく低下している。

II 「呼子朝市」の経緯

本章では、『呼子町史』および『呼子町史 ふるさと呼子』を中心に、「呼子朝市」の変遷について整理する。

1. 「呼子朝市」の成立と朝市の移転

玄界灘に面する呼子港は、元来漁業の盛んな土地であった。17世紀後半には、捕鯨業が本格的に開始された(呼子町史編纂委員会編, 1978: 524)。呼子地域で捕鯨業を牽引したのが中尾家である。初代甚六が1690(元禄3)年に「突き組」を始めて8代甚六が1877(明治10)年に捕鯨業を廃業するまで、中尾家は捕鯨組の組元であった。この捕鯨が盛んだった時期、鯨肉を荷籠で売り歩く「触れ売り」が「呼子朝市」の起源といわれている(呼子町史編さん委員会編, 2005: 41)。

「呼子朝市」が現在のような形態になったのは大正時代頃とされる。呼子地域の商店街が大正時代に中町付近から松浦町に移動したことに伴い、1923(大正12)年頃には朝市も移転してきた(福田, 2002)。福田(2002)によれば、1942(昭和17)年頃には第二次世界大戦により朝市は一時中断したが、戦後交通の基点があった松浦町へと全面移転したという。また、1964年頃には、交通上の問題による農協呼子支所横町有地への移転、

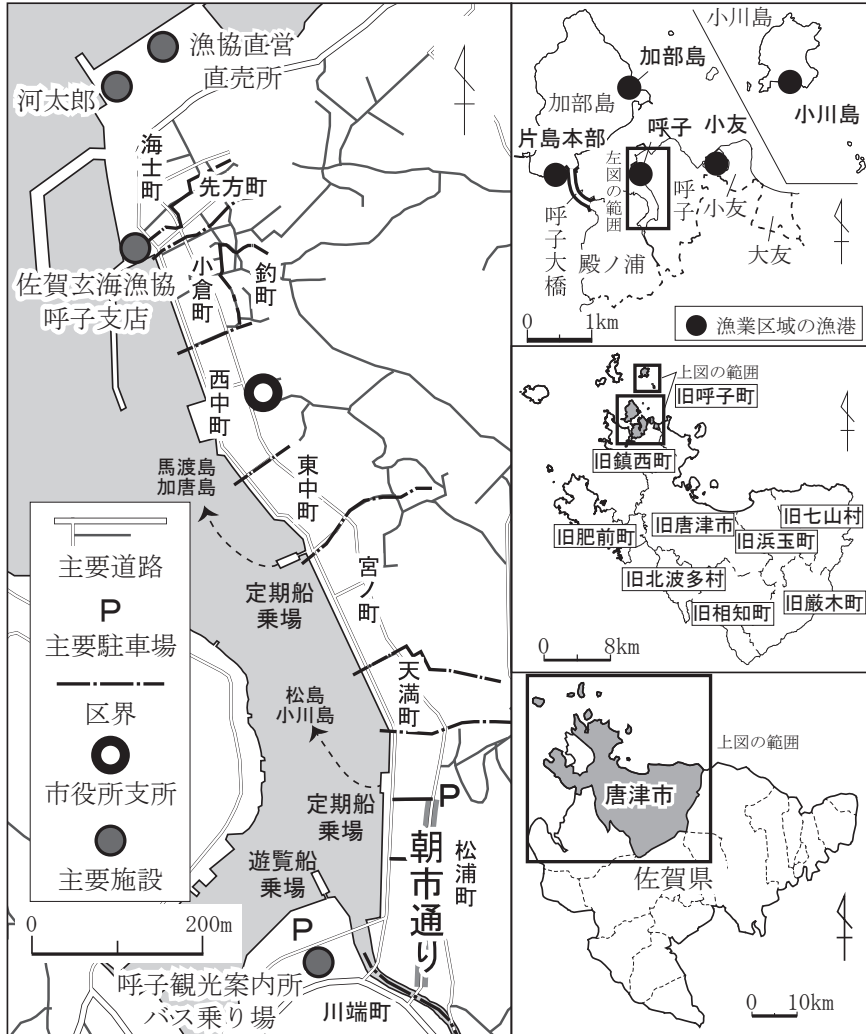


図1 研究対象地域

海岸道路の一部完成による海岸への移転，工事と交通上の原因による松信呼子支店裏道路への移転を経て，1965年7月には海岸道路の完成により，松浦商店街へ復帰したとされる（図2）。

商店街の軒先で開催されてきた朝市は，特に規制がないまま実施されていたため，出店の場所取りの競争が激化していった。さらに朝市が公道上で開催されていることから，道路交通法に関する警察からの指導に対して，1998年4月27日に呼

子朝市組合を発足させ，これに対応していくこととなった。

移転を繰り返してきた「呼子朝市」であるが，地域の情勢に柔軟に対応することで現在まで維持されてきたことがわかる。

2. イカの地域ブランド化

現在，呼子地域のイカは全国的に知られ，「呼子朝市」でも鮮魚や一夜干しとして販売されてい

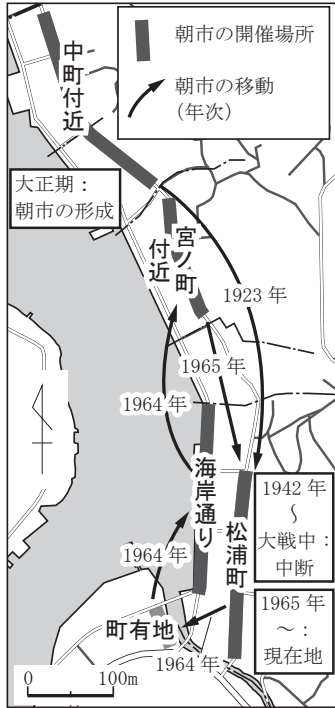


図2 呼子地域における朝市の移動
背景の地図は、現在のものを示す。
(聞き取り調査および福田 (2002) により作成)

る。しかし、イカが呼子地域の特産品として認知される以前には、一本釣漁業で獲れるタイがこの地域の特産物であった。この時期、呼子地域では鯛の生け盛り、鯛の骨むし、鯛茶漬、鯛味噌などの商品・料理が提供されていた。

呼子地域の特産品としてイカが知られるようになったのは、福岡県の活造り料理店「河太郎」がイカの活造りを考案して、1968年に呼子店を開店してからのことである。「河太郎」の店内では、大型の生け簀の中で泳いでいるイカを見ながらイカの活造りを食べることができることから、人気となったという。同店の評判により、その後呼子地域ではイカの活造りを提供する料理店が町内に10数軒開業した(呼子町史編さん委員会編, 2005: 106)。こうして呼子地域ではイカの需要が

増し、「いか釣」の経営体数もイカの漁獲量も増加していった。

図3は、1973年から2013年までの呼子地域の「漁業種別経営体数」を示したものである。漁業経営体数の推移をみると、1978年の804件をピークに大幅な減少傾向にある。内訳をみると、1973年の時点で「いか釣」は203件であり、1988年には284件と最盛期を迎えている。その後、「いか釣」の漁業経営体数は減少するものの、総数(延数)の約4割が「いか釣」を営んでいた。

また、漁獲量の漁種別構成比の推移をみると(図4)、1990年には「いか類」の漁獲量は総漁獲量の5割を超えている。呼子地域では、1年中剣先イカ、ブドウイカ、ヤリイカ、コウイカなど

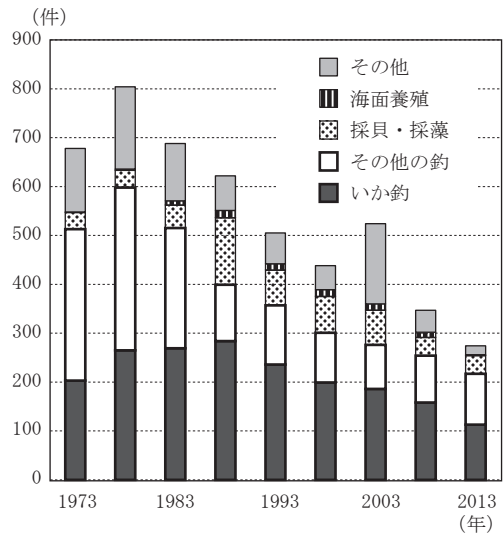


図3 呼子地域における漁業種別経営体数の推移 (1973 - 2013年)

- 1) 「漁業種別経営体数」は、漁業経営体が過去1年間に営んだすべての漁業種別を指すため、延べ数となる。
- 2) 呼子町は2005年に合併したため、2008年と2013年の数値は、旧呼子町内の漁業区域(「小友」, 「呼子」, 「加部島」, 「片島本部」, 「小川島」)の数値をまとめて示した。
- 3) 「いか釣」以外の釣に該当するものは、「その他の釣」とした。

(漁業センサスおよび伊東 (2011) により作成)

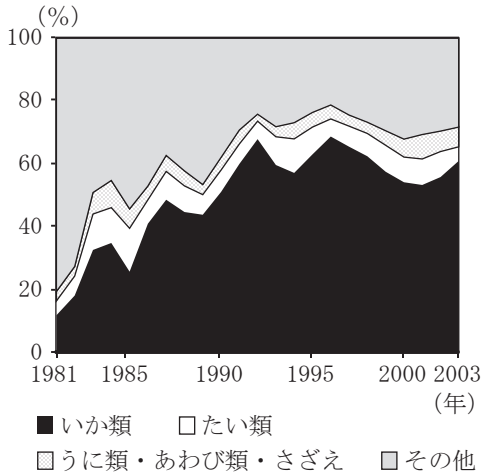


図4 呼子地域における漁獲量の漁種別構成比の推移 (1989-2003年)

「いか類」は、「するめいか」、「こういか類」、「その他のいか類」を含め、「たい類」は、「まだい」、「ちだい」、「きだい」、「くろだい」を含める。
 (九州農政局佐賀統計情報事務所：『佐賀農林水産統計年報』および九州農政局佐賀統計・情報センター：『佐賀農林水産統計年報』より作成)

様々な種類のイカが水揚げされる。以上のことから、「いか釣」が呼子地域の重要な漁業であることがうかがえる。

一方で、漁業資源の枯渇と、漁業従事者の高齢化などの課題により、玄界灘の漁業は全体的に停滞気味である(藤永, 2012)。呼子地域でも、朝市の出店者や商店街の店舗では後継者が課題となっている。朝市には、家族が漁業従事者であり漁獲の一部を出品している出店者も多いため、漁業従事者の年代について確認しておきたい。呼子地域の漁業従事者数は減少傾向にあり、図5に示した漁業区域別の漁業従事者の年齢構成をみると、各漁業区域において2013年のピークの年代が2008年より高齢にシフトしている。

こうした漁業の停滞傾向がみられる一方、前述したように認知度が上がった呼子地域では、新鮮なイカの活造りを現地の料理店で提供するととも

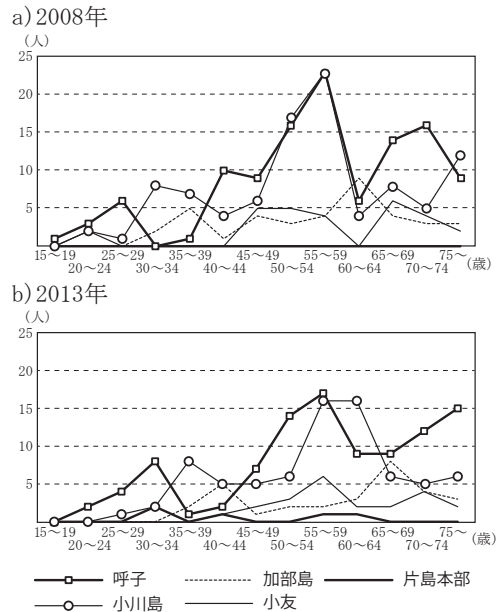


図5 呼子地域における漁業区域別漁業従事者の年齢構成 (2008年, 2013年)

各区域は呼子地域内の5つの漁業区域を示す。
 (漁業センサスより作成)

に、観光名所として知られる七ツ釜の遊覧や「呼子朝市」を組み合わせる誘客を図っている(森本・鈴木, 2010)。

イカの地域ブランド化への動きは、イベントの開催やキャラクターの作成でもみられる。1996年より第1回呼子イカ祭りが小川島で開催されており、2008年には剣先イカをモチーフにしたキャラクター「ケンちゃんサキちゃん」を制作し、「呼子のイカ」をPRしている。

3. 観光客の推移

1960年から2014年までの呼子地域の観光入込客数についてみる(図6)。「呼子朝市」が松浦町へ移転した1965年から、観光客は増加する。総数では1960年の14万人から1973年の50.1万人へと1度ピークを迎えた。この頃、朝市の出店者間では場所取りのトラブルが多く発生してい

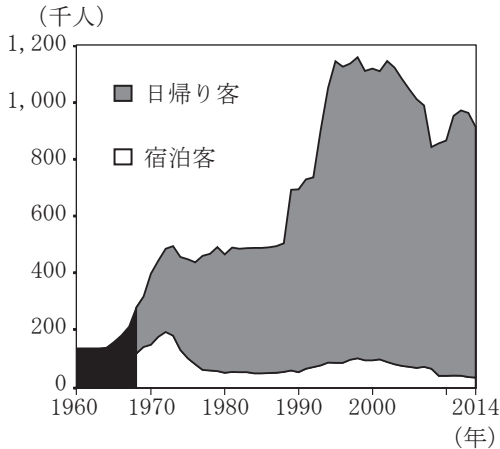


図6 呼子地域における観光入込客数の推移 (1960 - 2014年)

1967年以前は未分類のため、総数のみを示す。
(唐津市役所呼子支所資料、佐賀県：『佐賀県勢要覧』
および佐賀県：『佐賀県観光客動態調査』より作成)

た。1988年までは観光客が伸び悩むが、1989年からは70万人を超えた。さらに、1994年には100万人を超え、1998年には過去最多の116.8万人となった。以降、2006年までは100万人を超えていたが、徐々に観光入込客数は減少し、2008年には85.1万人となった。2011年以降は90万人台を維持している。

また、呼子地域への日帰り客と宿泊客をみると、全体的に日帰り客の人数が多く、宿泊客のピークは1972年の19.8万人であった。その後、宿泊客の数は徐々に減少し、1977年から1991年までは5～6万人台となった。1997年から2002年までは9万～10万人台へと回復したが、その後は減少傾向にあり、2014年には約3.7万人となった。

こうした宿泊客の減少とは対照的に、日帰り客数は増加傾向にある。1995年には106.5万人となり、2004年まで100万人を超えていた。2005年以降は80～90万人台になっている。

次に、利用交通機関別でみると、観光入込客数では自家用車・タクシーが多いことがわかる(図

7)。バスでの観光入込客数は1973年度の25.7万人から減少傾向にあったが、1994年度から1999年まで15万人を超えている。

発地別では、佐賀県を除く九州からの観光入込客が多い(図8)。しかしながら、佐賀県内からの観光入込客数も増加傾向にあることがわかる⁴⁾。

以上のように、呼子地域への観光入込客は1960年代後半から1970年代前半にかけて、さらに1980年代後半から1990年代半ばにかけての2つの段階を経て増加した。

以上のような観光客の増加に伴い、「呼子朝市」は、旅行会社からの要望を受けて1989年からバスを駐車できる市営駐車場を朝市通り近くに設けた⁵⁾。さらに、商工会により、2001年8月には商店街の買い物客のために、朝市通り駐車場が整備されている(呼子町史編さん委員会編、2005：115)。

また、1998年に加部島と九州本島を繋ぐ呼子

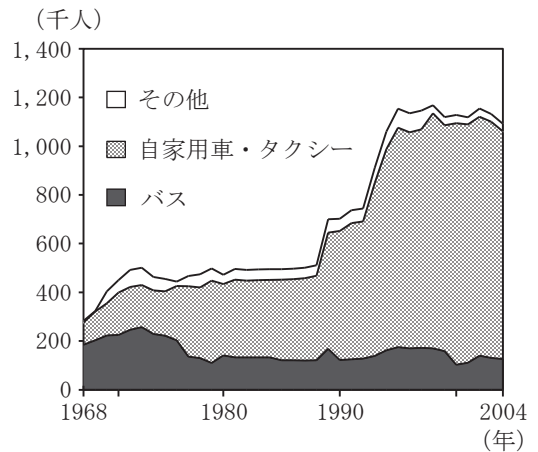


図7 呼子地域における利用交通機関別観光入込客数の推移 (1968 - 2004年)

- 1) 1995年までは年度の数値、1996年以降は年の数値である。
- 2) 「バス」には、観光(団体)バスだけでなく、路線バスが含まれる。
(佐賀県：『佐賀県観光客動態調査』および佐賀県資料より作成)

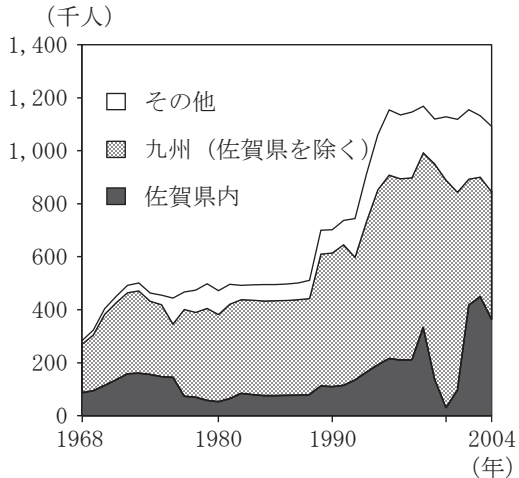


図8 呼子地域における発地別観光入込客数の推移
1995年までは年度の数値、1996年以降は年の数値である。
(聞き取り調査、佐賀県：『佐賀県観光客動態調査』および佐賀県資料より作成)

大橋が開通し、2001年には西九州自動車道と福岡市都市高速道路が接続するなど、交通面でも整備が進んできた。

Ⅲ 「呼子朝市」の現状

1. 「呼子朝市」の概要

「呼子朝市」は、呼子朝市通りにおいて8:00～12:00まで元旦を除き毎日開催されている。朝市に出店するには、呼子朝市組合に登録しなければならない。2015年度の組合員数は99人である。平日の出店数は約30人、休日は約60人である。

朝市に出店する商品は、呼子名産のイカやアジの一夜干し、アジやサバのみりん干しなどの加工・乾物水産(図9)、イカ・ウニ・アワビ・サザエなどの鮮魚(図10)、季節の野菜や果物(図11)、その他、陶器や弁当など(図12)である。図9～12から確認できるように、店主が立って商売する場合と座ったまま商売する場合がある。また、青果や鮮魚、加工・乾物水産については、季



図9 加工・乾物水産を売る店

加工・乾物水産の商品は、腰丈の高さの台や荷台の上に網を敷き、その上に並べられている。店主は立って接客する。

(2014年11月22日撮影)



図10 鮮魚を売る店

鮮魚は、道路に直接板を置き、その上に並べられる。もしくは、ひざ丈の高さの台の上に並べられる。店主は立って接客するか、簡易いすに座ったまま接客する。

(2015年2月8日撮影)

節によって扱う商品が変わる(図13)。また、店舗前に同店が出店する場合(図14)と、店舗と出店者が共存する場合(図15)がある。

呼子朝市組合の事務局は、NPO法人SCRUM呼子が運営している。会員から1年間の組合費として、間口1m契約であれば7,000円、1.5m8,000円、2m以上9,000円を徴収し、道路使用許可等



図11 青果を売る店

青果は、道路上にカゴや木箱、発泡スチロールを置き、その中に並べられる。店主は、座布団や簡易いすに座り接客する。

(2014年11月22日撮影)



図12 陶器を売る店

陶器は、木箱やカゴを土台とし、その上に並べられる。店主は、商品の前に立ち、接客する。

(2014年11月22日撮影)

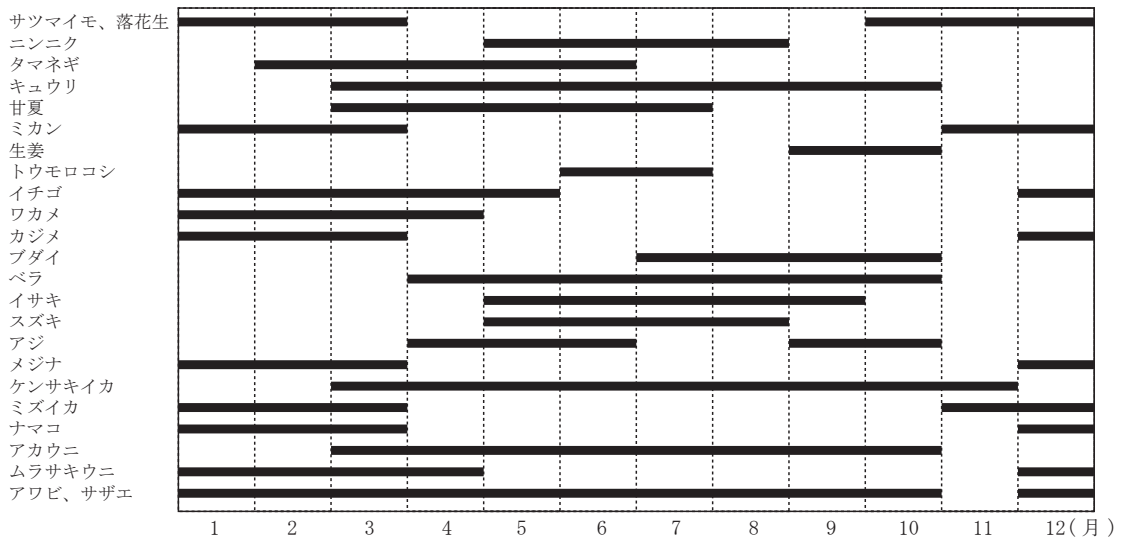


図13 「呼子朝市」への主な出品物の変化

1) 棒は出品される時期を示す。

(呼子朝市組合資料より作成)

の申請許可を一括して行っている。そのため、出店者はあらかじめ決められた出店場所に出店する(図16)。以前は、期間限定の飛び込み営業者に対しても、出店料を払えば出店できる形態を採っていたが、道路使用許可の観点から、飛び込み営

業者を受付けていない。SCRUM呼子は、これら出店者に対する購買者からのクレーム対応や衛生管理指導を行うと同時に、元旦以外の年間364日間の市を常に活気づけるため、売り上げが見込めない場合でも毎日出店するよう、出店者に指導・



図14 店舗前に同店が出店するパターン
店舗前に同店が出店するケースは、商品の品揃えが良く、店舗従業員が接客する。

(2014年11月22日撮影)



図15 店舗と出店者が共存するパターン
店舗と出店者が同時刻に営業する場合は、店舗の商品陳列を遮らないように、出店者の配置に工夫がなされている。

(2014年11月22日撮影)

奨励している。

SCRUM呼子は、呼子朝市組合の事務局を運営するほか、各種団体主催のイベント事務局を請け負っている。例えば、2013年度では、水光呼子港まつり実行委員会が主催する第39回水光呼子港まつり（2013年8月4日）や、呼子朝市ふれあいフェスタ実行委員会が主催する第12回呼子朝

市ふれあいフェスタ（2014年3月24日）の事務局として委託を受け、イベントの企画、運営に携わった。また、風に見える丘公園の管理・清掃業務を唐津市から受託していたり、呼子地域の旅館業者に対してレンタサイクル事業を行ったりしている。

1998年4月27日に呼子朝市組合が82名の会員で創設されるまでは、出店者がフリーマーケットの形態で自由に場所を選び出店していたため、出店数の推移などは統計的に整理されていない。呼子朝市組合が設立されてからの組合員数は、SCRUM呼子によると、呼子朝市サミットが開催され、呼子朝市ふれあいフェスタがスタートした2002年の174人をピークに、2011年95人、2012年86人へと減少した。この減少理由は、組合員の高齢化と、道の駅や地元産品を扱う大型店などに、客と同様に出店者もシフトしていったことがあげられる。しかしながら、近年は、2013年には95人、2014年98人、2015年99人と、減少をくい止め微増している。図17は、地区別の組合員の増減を示したものである。いずれの地区も、減少しているが、観光客向けに鮮魚を中心に販売する加部島は減少率が小さい。

2. 調査概要

本調査は、「呼子朝市」の実態を明らかにするため、「呼子朝市」出店者に聞き取り調査を実施した。調査日は、2014年12月1日（月）、2015年1月26日（月）および2月8日（日）の3日間であり、回答数は39件であった。

3. 調査結果

調査結果について、出店品目を大きく4分類（A.鮮魚11票、B.加工・乾物水産13票、C.青果8票、D.その他7票）に区分した表が、表1である。出店品目別に出店者の特徴を見出す。

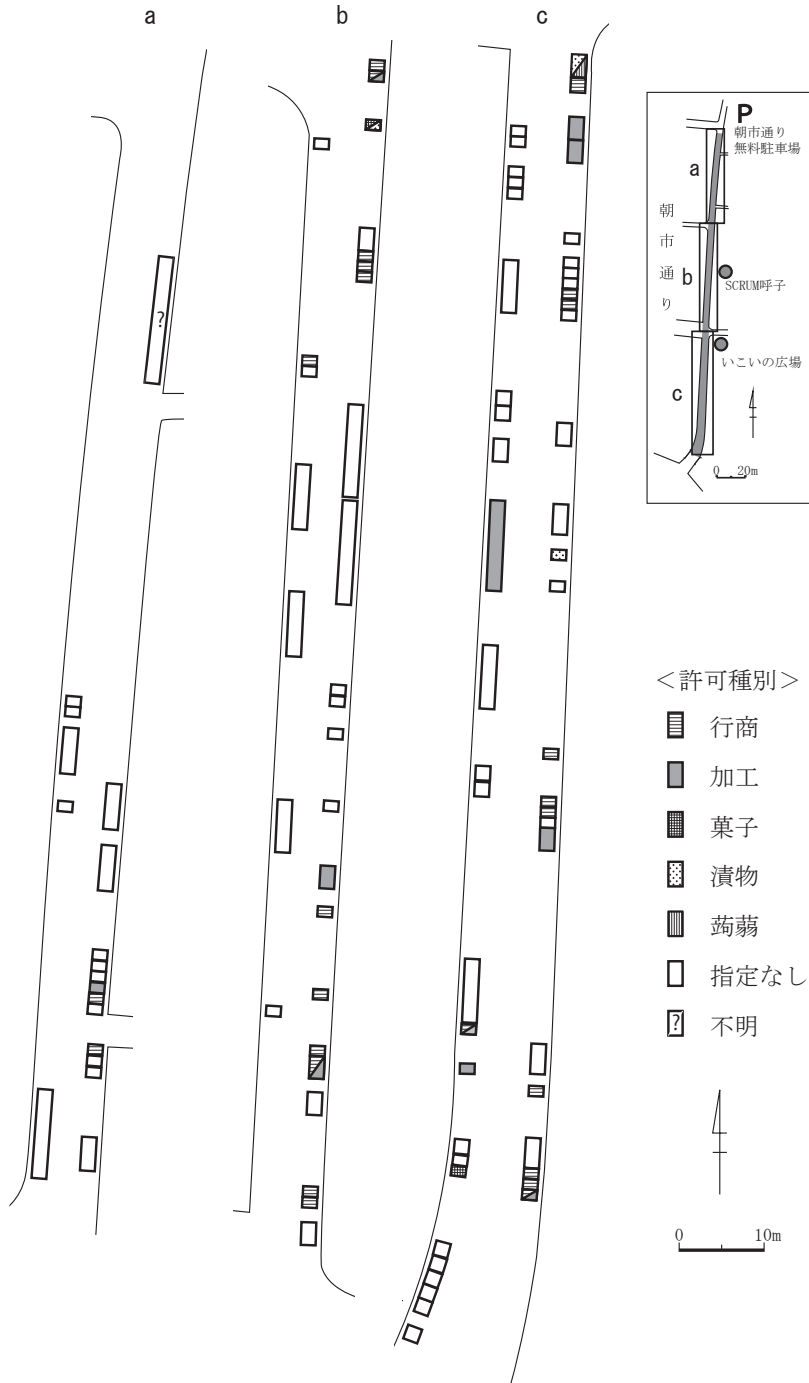


図16 呼子朝市の登録店舗の配置図 (2015年度)

「行商」とは、保健所の許可申請が必要な鮮魚の販売を指す。「加工」とは、加工・乾物水産物の販売を指す。「指定なし」とは、上述以外の販売を指し、生鮮野菜の販売を主とする。

(呼子朝市組合資料より作成)

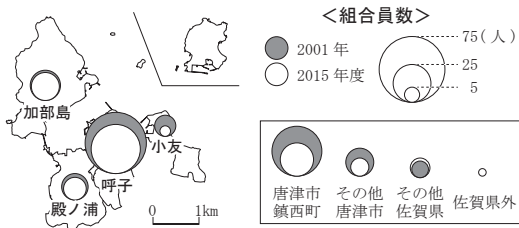


図17 居住地別呼子朝市組合員数の変遷
(2001年, 2015年度)

小川島を居住地とする組合員は兩年ともになし。
(福田(2002)および呼子朝市組合資料より作成)

1) 鮮魚

出店者の年齢は、50歳代から80歳代までで、60歳代と70歳代が多い。居住地は、呼子地域(呼子)5名、呼子地域(加部島)5名、唐津市鎮西町1名という内訳である。加部島からの出店者は、加部島と呼子をつなぐ呼子大橋が開通した1989年以降に増えた。ウニ・アワビ・サザエなどの鮮魚を朝市で販売するのは、主に加部島の住民であることがわかる。契約規模は、1軒につき1~1.5mと小規模である。出店曜日は、土日のみ出店するか、土日を中心に1週間出店する人がほとんどであることから、「生活市」というより「観光市」が意識されていることがわかる。また、アワビ・サザエ漁は、10月末から12月中旬まで禁止されるので、朝市ではこの期間にそれらの商品を並べることはない。生業は採貝藻業などの漁業がほとんどで、農業と兼業している場合もある。他には、その他の生業がなく、夫が漁で収穫したものを妻が販売している場合もある。

2) 加工・乾物水産

出店者の年齢は、40歳代から80歳代までで、70歳代と60歳代が多い。居住地は、ほとんどが呼子地域である。契約規模は、他のどの品目の契約よりも広く、自社の店舗前を登録し、確保するだけでなく、支店を設けている場合もある。具体的な品目については、イカやアジ等の乾物水産、

アジやサバのみりん干し、ウニの瓶詰等の加工水産であった。1月から12月までの毎日出店している者がほとんどで、商売に対する意識が高いといえる。その他の生業は水産加工業であるか、自宅で製造して販売するかのいずれかである。加工する魚介については、仕入れるものがほとんどで、漁をして加工生産するものは13軒中3軒のみであった。

3) 青果

出店者の年齢は、60歳代から80歳代までで、70歳代と80歳代が多く、最も高齢化が進んでいる。居住地は、唐津市鎮西町がほとんどであり、契約規模は、1~1.5mと小規模である。出店期間については、先代から引き継いで30年以上続いている者と、朝市組合が創立した頃から出店を始め約20年になる者の2つのパターンに分けられる。品物がある限り毎日出店するという回答が多かったが、登録者数に対する回収数の割合の少なさから、休みがちなのも多いと推察される。その他の生業はほとんどが農業であり、季節に応じて様々な野菜を生産し販売している。また、漬物や蒸かしサツマイモなど加工した状態で販売する品もある。多くが農協や道の駅など、他に農産物を出荷することで主な収入源を確保しており、朝市での収入のみに依存している者はほとんどいない。野菜についても加工・乾物水産についても、購入者は地元客よりも観光客が多いが、青果についてはその差が小さい。

4) その他

出店者の年齢は、60歳代から90歳代までの6名と、まだ始めて2カ月の30歳代が1名である。出店者は、これまでの近隣からだけでなく、唐津市湊町や有田町、福岡市といった比較的遠方から来ている。出店品目は、漬物、弁当・菓子(まんじゅう)、焼き芋のような加工品や、「ヤクルト」製品、陶磁器などの小売品である。弁当・菓子(ま

表1 出店品目別出店者の特性

A. 鮮魚											
出店者	出店開始時期	年代	性	住所	移動手段	契約幅(m)	出店曜日	出店時期	出店品目	その他の生業	仕入・加工
A-1	1960年代～	80代	女	呼子地域(呼子)	徒歩(荷車)	1.0	土日	5月～8月	鮮魚	漁業	漁⇒販売
A-2	1970年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	自動車(送迎)	1.0	毎日	通年	鮮魚	漁業	漁⇒販売
A-3	1980年代～	80代	女	呼子地域(呼子)	自動車(送迎)	1.0	毎日	通年	鮮魚(カサゴ・サザエ)	漁業	漁⇒販売
A-4	1980年代～	70代	女	唐津市鎮西町	徒歩(荷車)	1.0	週2～3回	11月～3月	鮮魚(カキ), 野菜, 米	農業(米), カキ採り	生産⇒販売
A-5	1980年代～	70代	女	呼子地域(加部島)	自動車	1.0	週3～4回 (土日含む)	1月～10月	鮮魚(ウニ・ナマコ・サザエ), ビーナッツ, にんにく	漁業	漁⇒販売, 仕入⇒販売(野菜)
A-6	1980年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	自転車(荷車)	1.5	毎日	12月～5月	鮮魚	なし	漁⇒販売
A-7	1980年代～	60代	女	呼子地域(加部島)	自動車	1.0	土日	1月～10月	鮮魚(サザエ・ウニ・ナマコ)	漁業, 牛繁殖	漁⇒販売
A-8	1990年代～	70代	女	呼子地域(加部島)	自動車(送迎)	1.0	土日祝	1月～10月	鮮魚(アワビ・サザエ), 果物(みかん・落花生)	農業(みかん・ 落花生)	漁⇒販売, 生産⇒販売
A-9	1990年代～	70代	男	呼子地域(呼子)	自動車	1.0	土日	通年	鮮魚	漁業	仕入⇒販売, 漁⇒販売
A-10	1990年代～	50代	女	呼子地域(加部島)	自動車	1.0	土日祝	通年	鮮魚(イカ・オニノツメ), 野菜, 果物(伊予柑)	農業, 漁業	漁⇒販売, 生産⇒販売
A-11	2000年代～	50代	女	呼子地域(加部島)	自動車	1.0	土日, 祭り	通年	鮮魚(海産物)	なし	漁⇒販売
B. 加工・乾物水産											
出店者	出店開始時期	年代	性	住所	移動手段	契約幅(m)	出店曜日	出店時期	出店品目	その他の生業	仕入・加工
B-1	1960年代～	70代	女	呼子地域(殿ノ浦)	徒歩もしくは 自動車(送迎)	1.0	日とが 良い日	通年	乾物水産, 加工水産	なし	仕入⇒販売, 仕入⇒加工⇒販売
B-2	1970年代～	70代	女	呼子地域(呼子)	タクシー	8.0	毎日	通年	加工水産(アジ・サバ), 焼き 物(カキ), 揚げ物	水産加工	仕入⇒加工⇒販売
B-3	1970年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	徒歩(荷車)	2.0	土日	通年	乾物水産(イカ・アジ)	水産加工	仕入⇒加工⇒販売
B-4	1980年代～	70代	女	呼子地域(呼子)	徒歩(荷車)	1.0	毎日	通年	乾物水産, 加工水産	なし	生産⇒加工⇒販売
B-5	1990年代～	80代	女	呼子地域(呼子)	自動車	2.0	毎日	通年	加工水産	水産加工	仕入⇒加工⇒販売
B-6	1990年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	自動車	2.0	毎日	通年	乾物水産, 加工水産	なし	仕入⇒加工⇒販売
B-7	1990年代～	40代	男	呼子地域(呼子)	店舗前	6.0	毎日	通年	加工水産(アジなど)	水産加工	仕入⇒加工⇒販売
B-8	2000年代～	80代	女	呼子地域(加部島)	自動車(送迎)	1.0	週2回	通年	乾物水産(イコ・ワカメ)	なし	仕入⇒販売
B-9	2000年代～	70代	女	呼子地域(呼子)	バイク	1.0	週3回	通年	乾物水産(イカ)	なし	漁⇒加工⇒販売
B-10	2000年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	自動車(送迎)	2.0	毎日	通年	乾物水産(一夜干し)	なし	仕入⇒加工⇒販売
B-11	2000年代～	50代	女	唐津市鎮西町	徒歩	5.0	毎日	通年	加工品(ウニ瓶詰)	水産加工	仕入⇒加工⇒販売
B-12	2000年代～	40代	女	呼子地域(呼子)	自動車	2.0	毎日	通年	乾物水産, 加工水産	水産加工	漁⇒加工⇒販売, 仕入⇒加工⇒販売
B-13	不明	不明	男 女	呼子地域(呼子)	店舗前	3.0	毎日	通年	加工水産	小売	仕入⇒販売

C. 青果

出店者	出店開始時期	年代	性	住所	移動手段	契約幅(m)	出店曜日	出店時期	出店品目	その他の生業	仕入・加工
C-1	1960年代～	80代	男	唐津市鎮西町	自動車	1.0	毎日	5月～1月	果物(ぶどう・みかん)、野菜	農業(みかん・ぶどう)	生産⇒販売
C-2	1970年代～	80代	女	唐津市鎮西町	自動車(送迎)	1.0	毎日	通年	野菜, 果物	農業(みかん)	生産⇒販売
C-3	1980年代～	70代	女	唐津市横野	自動車	1.5	週4日以上	通年	野菜(白菜・かぶ・パセリ等), 乾物水産(カジメ・ヒジキ・ワカメ)	農業	生産⇒販売
C-4	1990年代～	80代	女	唐津市鎮西町	徒歩(荷車)	1.0	毎日	通年	野菜, 生花(菊), 漬物	農業	生産⇒加工⇒販売, 生産⇒販売
C-5	1990年代～	70代	女	唐津市鎮西町	バイク	1.5	毎日	9月～7月	野菜, 果物(みかん)	農業	生産⇒販売
C-6	1990年代～	70代	女	唐津市鎮西町	自動車(送迎)	1.0	日	通年	ピーナッツ, 野菜(さつまいも・そらまめ), かりんとう	小売	仕入⇒販売, 生産⇒加工⇒販売
C-7	1990年代～	60代	女	呼子地域(殿ノ浦)	自動車	1.0	不定期	通年	野菜	農業	生産⇒販売
C-8	不明	70代	女	唐津市鎮西町	自動車	1.0	毎日	9月～6月	野菜	農業(たばこ・野菜・米)	生産⇒販売

D. その他

出店者	出店開始時期	年代	性	住所	移動手段	契約幅(m)	出店曜日	出店時期	出店品目	その他の生業	仕入・加工
D-1	1950年代～	80代	女	唐津市鎮西町	自動車(送迎)	2.0	不定期	通年	漬物, こんにゃく	農業	生産⇒加工⇒販売, 仕入⇒加工⇒販売
D-2	1970年代～	90代	女	呼子地域(呼子)	徒歩	3.0	毎日	通年	陶器, 食品(はちみつ・りんご酢), 衣類・かばん	小売	仕入⇒販売
D-3	1970年代～	60代	女	呼子地域(呼子)	徒歩	1.0	毎日	通年	ヤクルト製品	小売	仕入⇒販売
D-4	1980年代～	60代	女	唐津市湊町	自動車	1.0	毎日	通年	漬物, 野菜	農業(れんこん)	生産⇒加工⇒販売, 生産⇒販売
D-5	2000年代～	70代	女	唐津市湊町	自動車	2.0	毎日	通年	野菜, 弁当・まんじゅう, 陶器	食品加工	仕入⇒加工⇒販売, 生産⇒販売
D-6	2000年代～	70代	男女	有田町	自動車	4.0	毎日	通年	陶磁器	なし	仕入⇒販売
D-7	2010年代～	30代	男	福岡市西区	移動販売車	駐車場	日	9月～6月	焼き芋	小売	仕入⇒加工⇒販売

(各年次の国勢調査に基づいて作成)

んじゅう)や「ヤクルト」製品については、地元客が観光客よりも圧倒的に多いとの回答であった。

Ⅳ 唐津市呼子町における朝市の存続基盤

本章では、ⅡおよびⅢで示した朝市の出店品目別に朝市の存続基盤としての役割について考察する。

鮮魚については、加部島からの出店者が多く、ウニ・アワビ・サザエなどの鮮度の良い高級食材を取り揃え、観光客を対象とした休日の営業を中心としている。片山(2003)が「呼子朝市」の出店品目の新鮮度は「観光客」と「福岡県民」に対して顧客満足度が高いと示したように、これらの品目はやはり「呼子朝市」へ観光客を惹きつける重要な要素といえる。

加工・乾物水産については、呼子地域(呼子)の出店者がほとんどで、アジやサバのみりん干しの加工業者からの出店も多く、従業員を配置して出店している場合も見られた。加工・乾物水産物は、鮮魚と違って保存が可能のため、通年での出店を可能にし、土産品として機能する。したがって、まとめ買いなど購買量も多く、出店者も売り上げを意識するところが多く見られた。

以上、二つの出店品目は、「呼子朝市」における「観光市」の要素として重要な機能を果たしている。Ⅱで示したように、イカが地域ブランド化されることによって、呼子地域がイカの水揚げ港として認知されるようになった。朝市において、鮮度の良い近海の魚介に加えて呼子地域を象徴するイカも売られていることは、呼子特有の朝市の雰囲気醸成している。

青果については、唐津市鎮西町からの出店者が多く、高齢化の進展が最も進んでおり、地元住民や他の出店者によって購入されることが多いが、売上を目的としていない出店が多く見受けられ

た。このような売り上げよりも健康のため、もしくは他の朝市出店者と交流するために、出店していることも多い⁶⁾。これらの青果の出店者によって、朝市の賑わいが補強されているといえる。

その他、漬物や焼き芋、陶器などを出店する者は、遠方から来ている。これらの商品は、土産品目の多様性を創出していると同時に、他の出店者や地元住民の購買意欲をも高めている。

Ⅴ 結び

「呼子朝市」は、Ⅱで分析したように、地域の変化に合わせて移動しており、また法律への対応のために組織化するなど柔軟に対応してきたことがわかる。また、呼子地域において中心地としての機能が低下するなか、「呼子朝市」は、住民の買い物先の変化とそれに対応した生産者の出品行動の変化によって、地元住民を対象とする「生活市」としての機能が低下していった。

他方で、Ⅲにおける聞き取り調査の結果、①鮮魚にイカが付加された呼子独特の出店品目構成による集客、②加工・乾物水産物販売による保存が可能な土産品の提供、③青果販売者による賑わいの補強、④その他の販売による土産品目の多様性の創出が、把握された。つまり、観光客を対象とする「観光市」としての機能が増して存続していることを意味する。

ただし、この存続基盤の背景にあるのは、「生活市」としての機能が消失されず、賑わいの補強につながっている点にある。さらには、出店者同士の交流を通しての労わり合いが、出店者の出店意欲を維持させ「生活市」としての機能を失わずに維持できたと捉えることができる。

呼子には「呼子朝市」以外にもイカを活用した雰囲気醸成されている。例えば、イカ釣漁船を鑑賞しながらイカ料理を味わうことのできる飲食店や、海岸沿いに設けられたイカの一晩干しの干

場、「回転式イカ乾燥機」といったものがみられる。しかし、今回は、朝市の観光化に着目し考察を行ったため、地域全体に渡るイカの観光活用に関するさまざまな視点からの考察には至らなかった。また、本稿は、朝市による地域の活性化を研究の背景としていたが、朝市と観光の関わりのみを検討にとどまり、実際朝市が開催されている商店街の活性化については検討できなかった。これらの点については今後さらに検討する必要がある。

[付記]

本研究は、平成26年度長崎国際大学国際観光学科共同研究「朝市の役割と観光活用に関する研究」の一部である。本研究の現地調査・資料収集などにおいて、呼子朝市組合の組合長小林昌克氏、同副会長原美智代氏、NPO法人SCRUM呼子宅井文雄氏、唐津市呼子支所産業課廣嶋幸喜氏および小川雅海氏、そして呼子朝市組合に所属する出店者の皆さまに多大な協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 生産者の交流の場、高齢者や女性の活躍の場(辻, 1999)、新たな流通チャネル、「地産地消」の機能(津久井, 2002)など、様々な視点で報告がなされている。
- 2) さらに、開催場所で分類すると、屋内市と街路市・露天市があること、開催日数や時間でも多様であることを示した。
- 3) 朝市ネットワークホームページによる。1988年に第1回が秋田県の五城目にて開催された。その7年後の1995年に再開され、以後1999年、2006年を除いて毎年開催されている。
<http://www.asaichi.ne.jp/> (2015年3月27日最終閲覧)
- 4) ただし、増加傾向のなかにあって2000年および2001年の数値が極端に低い理由は明確ではない。
- 5) 漁協が指定管理者となり運営している。(年間2~3万台の駐車のうち、1万台がバスとなっている。)
- 6) 「朝市は生きがいです。」(川尻, 2006:29)とあるように、出店者の多くは、営業目的だけでなく、

購買者との交流だけでなく、出店者同士の交流を励みに出店していることが多いことが把握できた。出店者同士で、売れ残った商品を物々交換する光景や、真冬の雨風で足腰が冷える中、温かい缶コーヒーを出店者同士で分け合う光景などを目にした。

文 献

- 伊東維年(2011):呼子町の漁業と観光-続・水産物の地産地消の事例研究に向けて-。熊本学園大学経済論集, 18(1/2), 133-172.
- 片山富弘(2003):ルーラル・マーケティングの実証研究:呼子朝市のCS戦略を中心として。流通科学研究, 2(2), 35-48.
- 川尻由紀子(2006):海の民の町 呼子の朝市。ひととき, 6(3), 23-33.
- 杉本 傳(2007):勝浦市における朝市の現況と存続要因の考察。臨地研究報告, 2, 51-55.
- 津久井 剛(2002):“地産地消”の推進役を担う朝市・直売所。SERIトピックス, 840, 1-6.
- 辻 和良(1999):農産物直売活動の魅力・問題点と展開方向-和歌山県における農産物直売所・朝市の取り組み-。フレッシュフードシステム, 28(8), 48-51.
- 中村智彦(2011):現代における「朝市」の役割:山形県置賜地方を事例に。神戸国際大学紀要, 81, 1-11.
- 福田善乙(2001):地域における街路市(朝市)の役割と地産地消。社会科学論集, 80, 55-86.
- 福田善乙(2002):日本における主な街路市・朝市(2)-佐賀県の呼子朝市-。社会科学論集, 83, 117-195.
- 藤永 豪(2012):玄界灘の漁業と観光。野澤秀樹・堂島亮平・手塚 章編『日本の地誌10 九州・沖縄』朝倉書店, 230-233.
- 細野賢治(1997):都市農業存続の可能性に関する一考察-寝屋川東部地域の朝市による地域交流を事例として。農政経済研究, 20, 63-73.
- 三原育子(2003):農村女性による起業活動とその評価-千葉県流山市農家生活研究会朝市部会を事例として-。農業経済研究 別冊 日本農業経済学会論文集, 2003年号, 63-65.
- 森本剣太郎・鈴木 武(2010):朝市の現状基礎分析-沿岸域の地域活性化に向けて-。国土技術政策総合研究所資料, 559.
- 呼子町史編纂委員会編(1978):『呼子町史』呼子町。
- 呼子町史編さん委員会編(2005):『呼子町史 ふるさと呼子』唐津市。